

賀来神社の大名行列について

二一 宮 好 雄

一、はじめに

筆者は本誌第十号において、柞原八幡宮と賀来善神王宮の祭神の關係について、また同第二十八号において賀来荘と賀来神社のことに若干触れておいたが本稿では本行われる賀来神社の大名行列について主として柞原八幡宮文書により述べてみたい。引用文中特に出所を明示してないものは同文書である。

賀来神社の行列を大名行列と呼ぶことは明治以降の呼び方で、徳川藩政の終りまでは賀来社行列あるいは社役行列といわれていた。⁽¹⁾したがって現在の大名行列も藩政時代の社役行列を伝承しているものと考えられる。

二、行列の起原

賀来神社志（昭和初期）によると卯酉の年に国司が大神宝を奉獻する大神宝会に源を発していると伝えているが、現存する文書によつてもそのように考えられる。天福元年（一一三五）左辯官下、大宰府庁宣に賀来社（柞原八幡宮のこと）大神宝用途として阿南郷を以つて一円不輪の神領となさしむ、阿南郷中の本郷ならびに平丸名を以つてその用途に當つべし、豊後国阿南郷平丸名を不輪の神領として賀来社大神宝を勤めさしむ。とあり、ここにてでくる平丸名は後に平丸賀来となり、さらに平丸が消えて賀来と變つた現在の大分市大字賀来すなわち大名行列を担当する部落である。⁽²⁾

したがって現在の賀来が、大神宝会の行列をやつたのは天福元年前後で、今より七百三十年程前からのことであるとみてよい。このことは善神王が柞原より賀来へ神幸する際には行列を行わず、還行のときに行われる。すなわち柞原八幡に対し大神宝奉獻の形式を残しているとみてよいだろう。

元享元年（一一三二）北条英時の御教書の中に賀来社神人と植田庄雑掌宗清の訴訟につき「文保元年（一一三二）八月九日九月四日両度振三神宝」とあり行列道具を振る形式もあつたようである。

三、経 過

阿南本荘が神領としての勢力が強かつた永録四年（一一五六一）辛酉には南北松富（今の挾間町）から大神宝を調進している。また大友家より卯年ならびに酉年に盛んな供ぞろえで柞原へ馬や太刀を奉獻している。⁽³⁾

大神宝調進の習慣とみられる行列が賀来に固着化したのは柞原社の最高位者であつたという平幸秀とその直領であつた賀来平丸との関係が大きな原因をなしているとみている。徳川藩政時代⁽⁴⁾に入つて府内藩主日根野義明が盛んに市を開き商業の發展を策した。浜の市も盛んになつたが、そのころより市の繁栄策として大神宝会に類した社役行列が作られたものではなからうかと思う。というのは善神王の賀来神幸はこの頃はすでに行われていたので単に柞原八幡宮に対する大神宝会とは考えられなくなつているからである。このことについては後日発表したい。

四、行列の内容

現今の賀来神社の大名行列には大名と称する中心人物が四名（大名三総大名一）おり大名行列の呼び名からみても中心人物が四名もあるのはおかしいが、これを信仰的な面からみると実は大名でなく大神宝調進の際の部落代表としての神童、つまり稚児ではないかと思われる。古来神事に従う児童が化粧しほお紅をつけおしろいをはき、眉をかきした⁽⁵⁾といわれるが現在の

名もそのとおりの粧をする童児である。

徳川時代高持百姓以上の童児が神童に選ばれたのであろう、このような、有力者の子供を選ぶ習慣は大正年間まで守られていた。

またかつて、この大名行列を見られた宮武省三氏や黒板勝美氏は大名行列とするならば挾箱が二つが定めとなつてゐるのにこの大名行列には一つしか無いのはおかしいと指摘されているが、この行列は社役神童の行列であるとするならばむしろ一つの方が正しいのではないかと思う。すなわち和漢三才図説の挾箱の項（両氏の引例も同じ）に慶長年中に定められたとして平士及庶人は一個を用い高官のものは二人双行一對の挾箱を用うとあり、稚児は一つでよいはずであり、二人双行一對の挾箱を出す桑原の大名は賀来郷の総庄屋で十分であつたので二つでよい。

両氏は大名行列を文字どおり、高士の行列と解釈したのである。

行列の編成順序等については明治以後加えられたものもあるが大給家の行列陣列によく類似していることは確かで、先頭の槍、鉄砲、弓の各大名を除けば、かつては大名行列に使用された道具の数々がそのまま残されているし、振り動作も古来のものが多く伝承されていることは確かで大名行列といつても過言ではない、しかし本来は信仰に基づく行列であつたことも事実であろう、またわずか幕末数年の記録であるが薩摩や肥後藩主が江戸参勤の際、野津原から鶴崎まで、たびたび賀来の住民が行列のお供に出されているのはやはり道具の振りがうまかつたのではなからうか、⁽⁷⁾つぎに大神宝会および大名行列・賀来の大名行列の編成を掲げる。（次下（ ）内は筆者註）

(1) 柞原八幡文書文永十一年（一二七四）大神宝調進の事

長御崎（露払い）、龍頭十二、各金銅鈴付幡十二流、長御崎装束十三具、隊御ほこ十二本有^二鈴幡^一、差葉六本、御ほこ一本付
鈴幡鏡、陣導装束一具付ほこ鈴面形一、みこし三基、御手入装束十二具、御唐くら十口、御馬ならし装束六具、御机帳六本
カギ取装束一具、（以下農産加工品等略）

(2) 宝永三年（一七〇五）八月十四日府内藩主大給近禎・浜
の市放生会参詣の行列（府内藩日誌）

石川三郎兵衛

鉄砲十丁

太田八百衛門

弓五丁

岩下曾兵衛

長柄十本

須藤八郎衛門

御持筒五丁

岩下左野右衛門

御弓

別当 二人

御先馬 二匹

立がさ

台がさ

対御槍大身

対長槍

目付 二名

(3) 昭和三十二年（一九五七）賀来善神王宮の大名行列

先払い先徒歩 十名

槍 十本

槍一 立がさ一

挾箱一 ぞうり一

徒士 二名

槍大名若党 二名

鉄砲 十丁

槍一 立がさ一

挾箱一 ぞうり一

徒士 二名

鉄砲大名一 若党二名

弓 十丁

槍一 立がさ一

挾箱一 ぞうり一

徒士 二名

弓大名一名 若党二名

大唐人がさ槍 一對

御歩行 二十五人

寸槍

十文字槍

中小姓 二十八人

小姓 二人

六尺 十人

御ぞうり取 二人

御引馬 一匹

中押へ

又者共

位校箱 八ツ

又槍 六本

大押へ

手島善太夫

津久井伊左衛門

二本道具

大夫目槍 一対

狭箱(二人双行一対)

立がさ

台がさ

大鳥毛槍 一対

島田槍布鈴付 一対

唐人がさ槍 一対

黒鳥毛槍 一対

大羽黒槍 一対

槍一 立がさ一 狭箱一

ぞうり一 床机一

徒士 二名

総大名一 若党二(桑原)

以下神役・神杖・白旗・御先槍等

後押へ

太鼓 多数

以上三つの行列を比較すると共通点もみられ、ことに(2)と(3)の比較において幾多の類似点がみられる。さきに述べた三大名の点を除けば大名行列と呼んでもさしつかえないと思う。

五、あとがき

本年は丁度行列年に当るのでまだ充分ではないが研究の一部を発表し御批判を乞うしだいでありませう。

なお時代の推移につれてこの大名行列も漸次実施困難となつてきているが、この行列保存上一つの障害となつてゐるものは、大名を出す家に対して大きい出費をしいる大名の華美な服装や酒食をとまなう主従関係などである。改めて簡素な信仰を基とした民芸として出発し直さないとやがてきらわれて衰亡の途をたどるであらう。

註 (1) (4) 「府内藩勘定所日記」天保十四年（一八四三） 智来善神王宮祭礼に付先例卯酉社役行列相動来候則当年相動候間此段御届宜敷様被

仰可候 卯七日

(5) 「安部庄屋文書」慶応三年丁卯

賀来社行列御時合柄に付例に不相成取止の儀郡役所に届出。

(2) 本誌第二十八号参照

(3) 『大友興廢記』外

(4) 渡辺博士「豊後国由原八幡宮領荘園の研究」

(5) 柳田国男氏監修『民族学辞典』三六六頁

(6) 「九州路の祭礼と民族・民族と歴史」

(7) 「安部庄屋日記」

（黒板勝美博士引用（民族と歴史七巻三号））